

書 評

「黒板アート甲子園作品集 高校生たちの消えない想い」日東書院

只木 慧
Kei TADAKI

黒板というのは教室という特別な空間の象徴的なものである。誰かに教室の絵を描いてと頼んだとき、それが机の並んだ部屋になるか教室になるかの大きなポイントは黒板があるかどうかだろう。整然と並んだ机の先に、教師が立ち、黒板に板書し全員がそれを見つめる。しかし同時に黒板はあまりに当たり前の教室の一風景であり、文化祭の装飾や行事のときのメッセージボードとして使われても、ここまで見事なキャンパスになるとは想像したことはなかった。

表紙を見てほしい。教師の持つチョークから生まれた恐竜が、じっと自分を生み出した教師を見ている。教師がこれを描いたのは授業の一場面なのか、あるいは何げない恐竜の雑談をしながらの板書に生徒がこの恐竜を見たのか。あまりにリアルなこの恐竜はこのまま描かれたら教師を食べてしまうのかもしれない。これが白い普通の紙に描かれた絵であれば、こんなストーリーは思い浮かばず、男性も教師に見えてこないのではないだろうか。この絵が黒板に描かれたものだからこそ、普通の絵にない物語が生まれる。特にこの黒板アートの題材として頻繁に学校の様子が描かれるのは、やはり教室の象徴である黒板には自分達の生活や青春の物語を描きたくなるからだろう。巨大な黒板は、その想いを受け止めるのに十分だ。

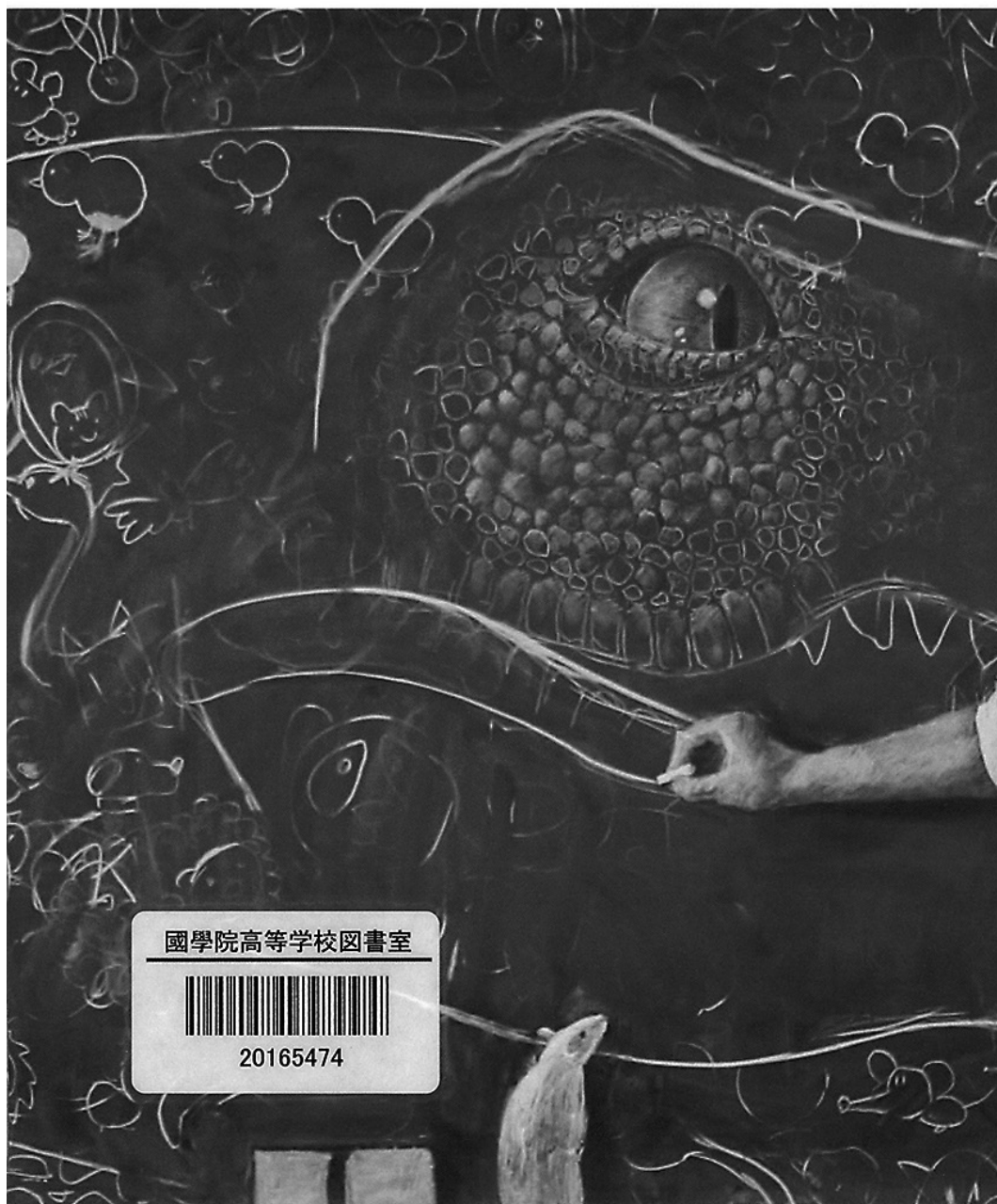
これらの絵を描いた生徒は、部活の仲間と、あるいは友人と、どんな想いで描いたのだろうか。まだまだ黒板アートの技法が確立していない中、描ききれない画材で、試行錯誤を繰り返す中で、どんな会話をしたのだろうか。この作品集の中にはたくさんの作品が載っているが、実はコメントもおもしろい。作品を作った経緯や工夫したところが簡潔に書かれているが、大変だったとか、二人で描いていたのに一人が来られなかったというストレートなコメントもある。きっと一つ一つの作品の制作過程にドラマがあったはずだ。これらの作品が、どんなドラマを経て描かれたのか考えるのも楽しい。

しかし、これらの作品は黒板に描かれている。授業が終わると黒板の文字が消されてしまうように、いずれこれらの作品は黒板消しで消さざるを得ないだろう。しかし、タイトルにあるように「高校生たちの消えない想い」はあるはずであり、思い出が残っていくはずである。そしてさらに、黒板が消されるのは次の授業があるからである。消された黒板は、次に描いてくれる人が現れるのを待っているのだろう。どんな作品に挑戦するか、そんなことも考えながら眺めてほしい本である。

ただきけい：司書教諭

黒板アート甲

高校生たちの消



國學院高等学校図書室



20165474

子園作品集

え ない 想 い

